

川崎大師教学研究所紀要・第10号抜刷
令和七年三月二十一日発行
川崎大師教学研究所

高野山開創説話について――院政期以降の展開――

苦米地誠一

高野山開創説話について

―院政期以降の展開―

苦 米 地 誠 一

一、はじめに

高野山開創説話は、弘法大師空海（七七四～八三五）による高野山開創について語られる説話群であり、弘法大師信仰の一部を形成する。中央の僧侶・学者を中心に作成された空海伝（弘法大師伝）に語られた説話については、かつて『六大新報』紙上に「弘法大師伝の靈異話」と題して連載をした中で些か紹介してきたが、学問的に厳密な資料操作をしたものではなかったし、またこの連載の過程で、扱う資料の位置付け、成立年代に関する見方も変化した。また武内孝善氏も既に『弘法大師空海の研究』第四部「高野山の開創」等^{〔1〕}の中で詳しく述べられている。今はそれらを踏まえた上で、改めて高野山開創説話について整理して紹介したい。

この説話群は、幾つかの要素の集成として理解される。大体は、

① 唐からの三鈷杵の投擲（飛行三鈷）

② 開創の時の三鈷と宝剣の発見（三鈷の松）

③ 高野山へ導いた犬を連れた獵師（南山の犬飼・狩場明神）

④ 山民・高野明神の案内と所領寄進

⑤ 丹生津姫（丹生明神）からの所領寄進

といった所であろうか。

紙幅の都合により十・十一世紀前半までの丹生津姫説話については別稿に述べた。⁽²⁾ 本稿では院政期初頭の成立と目される経範（一〇三一―一一〇四）撰『弘法大師行状集記』と『金剛峰寺建立修行縁起』以降に展開した説話群を見ていくこととする。また歴史上の人物としては「空海」と称し、信仰上に語られる場合には「弘法大師」「大師」と称することとしたい。

二、『行状集記』と『建立修行縁起』

十一世紀前半と推測される『遺告』類や『空海僧都伝』の後、十一世紀末から始まる院政期の初頭になるまで、高野山開創説話に大きな変化は無かったと思われる。小野僧正仁海（九五―一〇四六）

の『秘密家宗体要文』にも、後三条天皇（一〇三四～一〇七三）の東宮時代の護持僧であつた小野僧都成尊（一〇二一～一〇七四）の『真言付法纂要抄』にも特別な高野山開創説話は見られない。院政期の初めになって『金剛峰寺建立修行縁起（建立修行縁起）^③』が高野山の在地の中で成立し、京師では遍照寺法務経範（一〇三二～一一〇四）の『弘法大師行状集記（行状集記）^④』が成立している。この両書には相互の直接的な影響を見いだすことが難しく、共通する記事は、夫々に『御遺告』等から取り込んだものかとも思われる。

先ず『行状集記』では「金剛峯寺（字を高野と号す）條第九十三」^⑤に『御遺告』から丹生津姫の説話を引用するが『御遺告』本文のままであるため高野明神は現れない。また「高野四至敬白文」^⑥や「紀伊の国伊都の郡高野の峯に於て入定の処を請け乞は被るの表」^⑦（以下「乞入定処表」）などが引用されるが、それらと共に「三跣を抛げ上げる條第三十五」^⑧に、

伝に曰く。本朝に趣く船を泛るの日、海上に於て祈誓発願して曰く「所学の教法、秘蔵によつて処を擇ぶ。吾が朝に於て、若し感応の地有らば到りて此の三跣を点ぜむ」と。日本の方に向け

て三跣を抛げ上ぐ。遙かに飛んで雲中に入る。

とあり「海上に抛げる三跣を尋ね得る條第九十四」^⑨に、

或る伝に曰く。高野登山の時、明神、即ち山の中心に宿所を示す。聊か芟り掃ふの間、彼の海

上より抛げる三鈷、今に此の処に在り。之れに因つて仏法興隆の地、此の外に有らざると知る、と云々。三会の晝に至るまで密藏の法炬を滅せざら令めんと欲す。

という投擲三鈷と、その三鈷の発見の説話が語られる。後で見る『建立修行縁起』と似てはいるが小異もある。またここでは「或る伝」によるとされるが、この「伝」が『建立修行縁起』であれば、宝剣発見記事の見えないことに疑問が生ずるし「縁起」を「伝」とはいわないであろう。引用というのは文章的にも相違する。ともかく投擲三鈷と三鈷の発見を語る最初期の資料ということではできる。

次に『建立修行縁起』であるが、ここには十一世紀前半の御堂関白藤原道長（九六六～一〇二七）の高野山登拝の頃に唱導されたと考えられる空海（弘法大師）入定説話（生身入定信仰）と共に、先論⁽¹⁰⁾で述べたように高野山を現世における諸仏の浄土とする高野山浄土信仰（浄土往生相應の霊地）が語られるが、これは院政期以降の資料にしか現れない言説であり、根拠として引用される資料も偽文書と見られる。また『行状集記』には『建立修行縁起』からの引用が見いだし難いこと、逆に『建立修行縁起』にも『行状集記』からの引用が見られないこと、などから『建立修行縁起』の成立が『行状集記』成立と同時に院政期初頭にまで下がるものと考ええる。ここには帰朝の時の投擲三鈷説話⁽¹¹⁾が、

大同二年丁亥八月を以て本郷に趣く、舶を泛べるの日、祈請して云く「我が伝え学ぶ所の秘密の聖教、流布相應の地有らば、早く到りて之れを点ず可し」と。則ち三鈷を以て日本に向ひて之

れを投げれば、則ち三鈷、遙かに飛びて雲中に入る。

として語られ、殆ど『行状集記』と相似する。また高野山の開創について、⁽¹²⁾

漸く世間の囂塵を厭ひ、竊に禪定の靈峯を尋ぬ。弘仁七年孟夏の比を以て城外に出て経歴したまふ。大和国宇知の郡にて一人の獵者に逢ひたまふ。其の形深赤にして、長八尺計り。小袖の青衣を着、骨高く、筋太く、弓箭を以て身に帶し、大小の犬（二の黒犬）、之れに随従す。則ち和尚の過ぎ通るを見て、不審を問ふ。和尚、踟躕して子細を問訊したまふ。獵者の云く「我は是れ南山の犬飼なり。知る所の山地万許町にして、其の中に於て幽なる平原有り。靈瑞至りて多し。和尚、來臨し住したまへ。自ら以て助成せむ。犬を追ひ放て走ら令むるの間、即ち失せぬ。云云。大師、内心に案じ、默然として過ぎたまひ、紀伊国の堺の大河の辺に臨んで宿す。是に於て一人の山民有り。子細を談ずる処に申して云く「此れ従り南方に平平たる原沢有り。三面に山連つて、山門辰巳に開けたり。万水東に流れて、末流、一水に聚る。昼は常に奇雲を聳え、夜は常に靈光を現す。推察するに紀伊国伊都の郡の正南に当たれり。云云。則ち明旦に件の山人、隨身して、咫尺の間に件の原沢に至る。見巡するの間、寔に伽藍を建立す可し。次いで件の山人、密に大師に語りて云く「吾れは是れ、此の山の王なり。則ち之の領地を獻じて威福を増さむ。吾、山水に狎れて極めて人氣に鹿かなり。幸に菩薩に逢ひぬ。吾が徳至れり」と云云。則ち次の日に、伊都の郡を出でたまふ。大師、思惟したまふ。輪王即位の時、水楊を以て仙人に施したぬ。然りと雖も一針一

草も允されずんば過有り。故に六月中旬を以て表請して入定の処を点じ、一兩の草庵を作る。万事、違無しと雖も、年毎に一往す。彼の登山の路辺に十許町の沢有り。山王丹生大明神の社なり。今天野宮と云ふは是れなり。大師登山の初め、是の社の辺に一宿したまふ。則ち巫祝に託宣して曰はく「妾、神道に在つて威福を望むこと久し。今、此の処に到りたまふ。妾が幸なり。弟子、昔人為りし時、食国命、家地万許町を給ふ。南は南海を限り、北は日本河を限り、東は大日本の国を限り、西は応神山の谷を限る。冀はくは之れを永世に献じて仰信の情を表す」と云云。重ねて官符を給ふ。伽藍を建立せむが為に樹木を截り払ふの間、樹に彼の唐に投げる所の三鈷、巖然として有り。弥々歎喜を増し、則ち地主山王の告の如く密教相應の地といふことを知りぬ。地を墜り夷げるの処、地の下より一の宝剣を堀り出す。勅に依つて進覽す。崇りに依つて崇りを占う。占部、ト推すらく「当に今、銅の筒に入れて返して之れを安置したまふべし。今之れを案ずるに外護の大明神、惜しみ奉る耳」と云云

と見られる。ここには本稿の最初に挙げた、

①唐からの三鈷杵の投擲

②開創の時の三鈷杵の発見と宝剣の発掘（↓三鈷の松）

③高野山へ導いた犬を連れた獵師（南山の犬飼↓狩場明神）の案内

④山民・高野明神の案内

⑤ 丹生津姫（丹生明神）↓高野明神からの所領寄進

の全てが語られる。

⑤の所領寄進の問題については独特の記事が見られ、高野の地を案内した山人（山民↓山王⇨高野山の地主神。但し「高野明神」の名は現れない）の言葉として「吾れは是れ、此の山の王なり。則ち之の領地を献じて威福を増さむ。吾、山水に狎れて極めて人氣に饒かなり。幸に菩薩に逢ひぬ。吾が徳至れり」とあり、また「登山の路辺に十許町の沢有り。山王丹生大明神の社なり。今天野宮と云ふは是れなり。大師登山の初め、是の社の辺に一宿したまふ。則ち巫祝に託宣して曰はく」とあり神名が「山王丹生大明神」とされ、大師を高野山へ導いた山人と丹生津姫とが共に山王とされている。そのためか丹生津姫の託宣の内容が、山人である山王の言葉と丹生津姫の託宣とに分割されている。丹生津姫の託宣については、『遺告』類の様に「人の体を現して」ではなく、『御遺告』と同様に巫祝に託している。また明神の居た路辺の沢が、今の天野社であることが示されている。

①②に当たる飛行の三鈷杵の問題については、三鈷を抛げる記事は『行状集記』とほぼ一致する。ただしこれ以前に仁海の『秘密家宗体要文』⁽¹³⁾では、

大同二年丁亥帰朝す。海上の間、勝地を祈請す。種々の異有り。三股を投げて龍王を降伏す。真言院を賜り、壇を建てて修法す。東寺を給はりて宗場と定む。云々

とある。海上で勝地を祈請して種々の靈異があったとされるが、三鈷杵を投げたのは竜王を降伏する

ためであり、勝地を祈って投げたとはされていない。従って高野山における三鈷の発見も語られない。あるいはこの記事が誤られて『行状集記』や『建立修行縁起』夫々の基になったものか。

この投擲三鈷記事に対して、高野における三鈷発見記事は、『行状集記』では、弘法大師が初めて高野に登山した時に、明神が山中の宿所を示し（一宿するために藪を）芟り掃った所で三鈷を見つけた、とされるのに対して、『建立修行縁起』では改めて官符を賜り、伽藍を建立する為に樹木を截り払うと、樹（の枝）に三鈷が有ったとされる。更に地を掘った所で一の宝剣が出てきたので、勅に依って進覧すると祟りがあった。占部によれば、外護の大明神が惜しんだ為で、銅の筒に入れて（高野へ）返し、安置すべきである、という。『行状集記』と『建立修行縁起』では、同じ三鈷杵の投擲と発見が語られる以上、共通する祖話が在ったのであろうが、発見記事において、三鈷を発見した時期と経過が異なっており、また『建立修行縁起』にしか見られない宝剣記事が語られるなど相違が大きく、一方からもう一方への伝承とはいえないであろう。

『秘密家宗体要文』の三鈷記事では、三鈷は投擲されていなかった。それが同じ高野の地を求めての投擲三鈷となるには、この間に別の説話が語られ、それを『行状集記』や『建立修行縁起』が引いたものか。ただ個別に依拠したとすれば同じプロットになることに疑問があるし、中間に別の説話が存在したとすれば、その残らないことにも疑問が残る。

③④の高野の地を発見する時の案内が語られるのは『建立修行縁起』が初めてである。ここでは、弘法大師は高野山を開創する弘仁七年になって諸処を経歴し、この時に初めて高野へ至っており、空海が高野の地を発見した「乞入定処表」等に見られる「少年の日」とは時期が異なっている。

また発見の経過について、初め大和国宇智（宇智）郡で「南山の犬飼」と名のる一人の獵者に逢って最初の案内をされている。その形は「深赤にして、長八尺計り。小袖の青衣を着、骨高く、筋太く、弓箭を以て身に帶し、大小の犬（二の黒犬）、之れに随従す」とされるが、その姿は東寺の賢宝（二三三三～一三九八）の『弘法大師行状要集』などに引かれる『稻荷大明神流記』¹⁴で語られる紀州田辺の地で会った稻荷神の姿と同じである。これは神祇が人前に現れたときの姿として一般的なものであるというよりは『稻荷大明神流記』が『建立修行縁起』の南山の犬飼の姿を引き写したものと考えるべきであろう。また大和国宇智（智）郡は今の五條市にあたり、南都から奈良盆地をまっすぐ南下して御所市の南に位置する。また吉野からは紀ノ川沿いに西に向かつて橋本へ到るルートの途中になる。橋本市の東方、ほど近くの現・五條市犬飼町の犬飼山転法輪寺は、南山の犬飼と大師が出会った地とする縁起を語るが、これは後世に生み出された伝承であろう。山人は、大師が宿した「紀伊国の堺の大河の辺」から「南方に平平たる原沢有り」といっており、南下して高野へ達するルートを示している。その場合、大師の宿した処は橋本辺りということになる。これは『建立修行縁起』成立時期の高野登山ルートに依るものであろうか。道長の高野登拝ルートは、南都からどのように行ったものか明らかでないが、

藤原実資（九五七～一〇四六）の『小右記』治安三年十一月十日条によれば「路次の寺々を拝む。更に河内の知識寺を拝む」とあり、知識寺⁽¹⁶⁾の在った河内国（大阪府）の柏原市辺りを通過している。『建立修行縁起』では吉野も登場せずに、直接「大和国宇知郡」が登場しているが、やはりこの河内經由のルートがあったものか。或いは南都から南下する途中で、わざわざ道を西へ逸れて知識寺に立ち寄ったのか。知識寺を通った具体的ルートは不明であるが、「乞入定処表」のルートとは全く異なっているといえよう。

また南山の犬飼は「山地万許町にして、其の中に於て幽なる平原」の場所を知っており、「和尚、来臨し住したまへ。自ら以て助成せむ」といいながら、犬を走らせて失せてしまった。そこで大師は、紀伊国の堺の大河（紀ノ川）の辺で宿すると、そこに一人の山民が有って「此れ従り南方に平平たる原沢」があり「紀伊国伊都の郡の正南に当た」とされ、翌朝に案内をしてもらった。伽藍を建立す可き処であり、山人（山民）は、自分は此の山の王（山王＝地主神）と名のり「則ち之の領地を献じて威福を増さむ」という、本来は丹生津姫の託宣であつた所領寄進の言葉を大師へ語っている。ただし「高野明神」の名は見られず、また丹生津姫との関係も示されていない。また獵師である南山の犬飼と山人（山人である山王とは別の存在として語られている、といえよう。このように『建立修行縁起』は、『御遺告』『遺告』類等の影響を受けながらも、高野山開創説話においては独自の話が語られるようになっていく。またこれまでも紹介した所⁽¹⁷⁾であるが、興教大師覺鑑（一〇九五～一一四三）の言葉を伝える『真言宗

談義打聞集』⁽¹⁸⁾には、

土佐室戸は六町結界、東大寺は寺内結界の宣旨なり。大師七才にして土を集め大法事す。止む事無き女房来たりて云く「人同分に准じて悉地成就の法を行へ。弥勒の化身勤操僧正と云ふ者あり」とのたまふ。「吾必ず助成せむ」と。「此れより南、阿国に平原あり。悉地成就の処なり」と。大師、約束の如く受学畢つて件の国に行きて見れば、火のとぼいたる処あり。其の原のふもとに犬二疋具足し、弓箭を帶したる俗あり。大師と共に火の見える処に到りぬ。女房、助成承仕して行く。宝剣飛び来る。女房、また言く「此れより南、猶、勝地有り。悉地成就の勝処なり」と。さて土佐室戸へ行きぬ。明星来影す。大師、吐出す。其の処に今に光在り。

という話を見ることが出来る。高野山に至る話ではなく、求聞持法修行の場所に至る話となっているが、「止む事無き女房」は丹生都比売、「犬二疋具足し、弓箭を帶したる俗」は、全く「南山の犬飼」のイメージである。ただここで「止む事無き女房」は、大師が七歳で童堂を作っていた頃に現れており、そこで勤操（七五四〜八二七）に従つて「悉地成就の法」（＝求聞持法）を受法すべきことを教え、修法の成就を助成することを約束しており、しかも修行の場所として阿波国を示している。『御遺告』では、泥土で仏像を作り、童堂に祀つて礼拝（大法事）をしていたのは十二歳以降であるが、『打聞集』ではこれを七歳のことにする。また勤操が弥勒の化身とされ、明星天子（虚空藏菩薩）の化身とされていないことは注意される。大師は受法の後、阿波国で、灯のともっている平原のふもとで二匹の犬を連れ

た獵師と出会い、一緒に火の見える所へ行く時「止む事無き女房」も共にに行っているようである。更にここで「宝剑飛び来る」とされ『建立修行縁起』において高野山の地中より発見された宝剑を想起させるとともに、東寺の賢宝撰『弘法大師行状要集』に引かれる『阿波国太龍嶽縁起』⁽¹⁹⁾に見られる宝剑飛来記事へつながると考えられる。賢宝は『阿波国太龍嶽縁起』の記事には疑問があるとしており、⁽²⁰⁾その成立は南北朝期頃まで下がる可能性があるうか。また大師を幼少の頃より助成する女神は、覺鑊の伝記に見られる、覺鑊を衛護した春日の女神（四宮の姫大神）を彷彿とさせるが、案内をする獵師は高野の地を案内する南山の犬飼（狩場明神）としか見られない。ともかくこの『打聞集』の説話は『建立修行縁起』の高野山発見説話とよく似たプロットで求聞持法修行の場所を語る、ごく近い時期に語られた別箇の説話として注目できよう。

三、聖賢撰『高野大師御広伝』

『建立修行縁起』の後、醍醐寺の三密房阿闍梨聖賢（一〇八三～一一四七）撰『高野大師御広伝』では投擲三鈷の話に関しては『行状集記』を引き、ただ「布勢海宛消息」から寺院建立を発願する記事は引いて、⁽²¹⁾

大同元年八月。本郷に趣く船を泛るの日、祈請して誓を発して云く「学ぶ所の教法秘密、若し

感応の地有らば、我が斯の三鉢、飛び到りて点着せむ」と。乃ち日本の方に向けて之を抛げ揚ぐるに、遙かに空中に入る。飛帆の後、数しば漂蕩に遇ひ一願を発して云く「帰朝の日、必らず諸天の威光を増益し、国家を擁護し、衆生を利済せむが為に一の禅院を建てて、法に依て修行せむ。願はくは善神護念して早く本岸に達せしめん」と。忽ちに觀応有りて波涛漸く定まる。（金剛峯寺は其の願に依りて建立する所なり）

と見られ、寺院建立の発願が加えられている。また高野山の開創に関しては『建立修行縁起』の弘法大師を案内する文、「高野寺縁起等」・『金剛峯寺雜文』の「大阿闍梨云」の文、「乞入定処表」、「紀伊国司太政官符并国符案」を並べた後に、⁽²²⁾

官符を給ふの後、仁祠を結構せむが為に樹木を截り払ふに、唐土に於て投げ所れし三鉢、樹間に懸る。弥々歎喜を増し、則ち機縁相応之勝境たることを知り、又地主山王の告げる所の空しからざるを感ず。誠に是れ三会之暁に至るまで、密蔵を滅す可からざるの地なる耳。地形を墜り夷ぐるに、土中より一の宝剣を掘り出す。長さ五尺、広さ一寸八分。又前仏之遊処、伽藍之旧基と覺る也。勅に依つて觀覽に備ふ。然る間、不慮に祟りを成す。卜筮の奏する所、此の劍に当れり。仍て銅の筒に入れて返して之れを安置す。是れ乃ち外護の大明神、惜しみ奉る而已。其の後、高雄の旧居を去つて彼の山に移り入る。門人に語つて云く「吾が性、山水に狎れて入事に疎かなり。亦是れ浄雲の人なり。（以下略）

とある。『建立修行縁起』の三鉢・宝剣発見の記事に基づくが「三会之曉に至るまで、密蔵を滅すべからざるの地」というのは『行状集記』の話である。また宝剣については『建立修行縁起』には見えなかった「長さ五尺、広さ一寸八分」という大きさを記録している。また「吾が性、山水に狎れて入事に疎かなり。云々」の文を、大師が門人に語るのは『御遺告』の話であり、『建立修行縁起』では明神が大師に告げた所領寄進の言葉の中で語られている。その意味で『高野大師御広伝』は『御遺告』にも直接に拠っている、といえる。また『高野大師御広伝』では、この後に「初結界啓白文」などを収載している。

また金剛資某（伝兼意）撰『弘法大師御伝』は、武内氏によれば、作者不詳で、仁平二（一一五二）年の成立とされる。「修行巡礼」の段に「遺文」として『三教指帰』『序』の求聞持法修行の記事と「乞入定処表」を引き、「帰朝扱杵」には『高野大師御広伝』と同じく『行状集記』を引く。また「御住所」の高野山金剛峯寺には「高野四至啓白文」と「大殿の消息」⁽²³⁾を載せ、「高野付嘱の事」には『建立修行縁起』の「真然付嘱の遺告」を載せ、末尾の「雑部」の中に『建立修行縁起』の三鉢・宝剣発見記事を載せる。投擲三鉢記事も宝剣記事も『高野大師御広伝』と同じであり、両書の関係が考えられる。ただ『高野大師御広伝』も『弘法大師御伝』も、基本的には共に『行状集記』や『建立修行縁起』からの引用であり、特別な話は見られないといえよう。

また時代は下がるが、鎌倉時代の東大寺の学僧尊勝院宗性（一二〇二～一二七八）の『日本高僧伝要文抄』

は建長三（一二五一）年の成立で、それ以前に著されてきた高僧の伝記から要文を抜き書きして集めたものであり、日本における高僧伝としては思託（七五三～七七〇）撰『延暦僧録』に次ぐものとなるが、『延暦僧録』は逸文しか知れないので、現存するものとしては日本最初の高僧伝といえる。この中の「空海伝」は、『弘法大師伝全集』では「弘法大師伝要文抄」と称しているが、長谷宝秀氏によれば聖賢の『高野大師御広伝』から抄出したものとされており、高野山開創の話も同じものとなっている。ただ前に引く「紀伊国司太政官符并国符案」の終わりの参議従三位左大辨秋篠朝臣安人と左少史正七位上村主豊田麻呂の署名から「又云く」として引用しており、その為に、この二人が「官符を給わった後」に「仁祠を結構せむが為に樹木を截り払った」かのように読めるものとなっている。

四、「高野寺縁起」と『金剛峯寺雜文』

寛弘元年官符「雜事二箇条」を載せる「高野寺縁起」であるが、醍醐寺本『諸寺縁起集』には、その他の寺院の縁起と共に「高野寺縁起」の全体を見ることができ、『校刊美術史料 寺院編』上巻に収載される醍醐寺本『諸寺縁起集』⁽²⁵⁾は建永二（一二〇七）年七月に弁豪の書写した本である。内容は全体で二十種の寺院縁起の類を集成しており、高野山の縁起については「（十二）高野寺縁起等」⁽²⁶⁾としている。

初めに「大阿闍梨云。以真然僧正手書写取之」とされる一文があり、次いで「可以金剛峯寺吾入室一門弟子中相承領知之事」「高野建立初結界時啓白文」「紀伊国伊都郡高野寺鐘知識文」「弘法大師略記」「雜事二箇条」「応奉写秘密藏法文（勸縁疏）」を内容とする。「高野寺縁起等」の「等」は、特に高野山とは無関係な『勸縁疏』を指すものであろうか。

一方で『金剛峯寺雜文』²⁷は、初めに「建立後仏堂前草不生云々」の文、次いで「思出往願擬建立高野山 次第不同」として「布勢海宛消息」・「乞入定処表」・『御手印縁起』・「金剛峯寺鐘知識文」・「紀伊国伊都郡高野寺鐘知識文」・「高野山建立壇場結界啓白文」・「遺告真然大德等」の高野山開創部分・「高野寺修理事」・「可試度宗家年分事」・「高野山万灯会願文」・「勸進金剛峯寺仏塔兩界曼荼羅知識文」・『金剛峯寺建立修行縁起』、そして「金剛峯寺契定第三」として「伝法二会式目」・「建立金剛峯寺最初勸請鎮守啓白文」・「堅師記」・「高野宝塔供養願文」・「大阿闍梨云」・『建立修行縁起』の中の「真然付嘱の遺告」・太政官符「応試度真言宗年分度者学業并定得度日処事」・太政官符「応増加真言宗年分度者三人事」・玄蕃寮牒「応令阿闍梨及証師專一試度真言宗年分度三人事」・太政官符寛弘元年「紀伊国司雜事二箇条」・寛弘三年「大塔再興造立奏上」・太政官符「応宛修理金剛峯寺毘盧遮那宝塔料正税稻千束事」・長久三年「仏具施入状」・寛弘五年「金剛寺帖 伊都那賀有多三箇郡司等」・応徳三年「奉為先師入道親王於高野山建立灌頂堂供養願文」・寛治五年「禪定院願文」・康和五年「高野御塔供養」・「高野山參詣記」（中に「大殿消息」を含む）・「我昔遇薩埵偈」、となっている。

これを見ると「高野寺縁起等」に比べて『金剛峯寺雑文』は収集している史資料が多く、また院政期にまで涉っていることが知られるが、中で「大阿闍梨云」・「可以金剛峯寺吾入室一門弟子中相承領知之事」・「高野建立初結界時啓白文」・「紀伊国伊都郡高野寺鐘知識文」が重なっている。「可以金剛峯寺吾入室一門弟子中相承領知之事」は『建立修行縁起』の中の「真然付嘱の遺告」であるが、『金剛峯寺雑文』では『建立修行縁起』とは別にこれを載せており、『建立修行縁起』以前の成立の可能性が考えられる。しかし「高野寺縁起等」が『建立修行縁起』を知っていたかは不明である。また『金剛峯寺雑文』も大治二（一一二七）年の年記を持ち、これが最後の「我昔遇薩埵偈」のみに掛かる本奥書であるのか、『金剛峯寺雑文』全体の書写奥書であるかは不明であるが、収録される資料は、偽文書を含めてそれ以前の成立と考えられ、全体を院政期前半（白河院政期）のものと見ることができよう。また「高野寺縁起等」も「弘法大師略記」の中に正暦五（九九四）年の堂塔焼亡と延久四（一〇七二）年の年記が見られるが、延久四年は『高野春秋編年輯録』⁽²⁸⁾によれば、大御室性信法親王（一〇〇五～一〇八五）が庵室を奥院の側に結構し、中院御房明算（一〇二一～一〇六）が小野僧都成尊（一〇二一～一〇七四）より灌頂を受法して帰山した年とされる。これでは延久四年を記録する意味が不明であるが「高野寺縁起」成立の上限を示すとはいえよう。また「高野建立初結界時啓白文」「紀伊国伊都郡高野寺鐘知識文」と『勸縁疏』は『遍照發揮性靈集補闕鈔』巻第九に並んで収録されており、これによって『勸縁疏』が収録されたとすれば、その成立の上限は済暹が『補闕鈔』を収集・編纂した承暦三（一〇七九）年以

降ということになるうか。ただし偽文書とされる「高野四至啓白文」を収録していないのは『補闕鈔』を見ていなかったからとも考えられる。その他に収録された資料も、これを下ることが確実なものは見られないので、やはり院政期初頭の成立として良いと思われる。

ここで「高野寺縁起等」と『金剛峯寺雜文』に共通して見られる「大阿闍梨云」の一文であるが「高野寺縁起等」では「大阿闍梨曰」の後に「真然僧正の手書を以て之れを写し取る」という一文が加えられており、『弘法大師諸弟子全集』巻中には真然僧正記の『高野建立由来記』⁽²⁹⁾として収録されるが、編者である長谷宝秀氏は『金剛峯寺雜文』によつて上げたとされ、「高野建立由来記」という題は長谷氏の名づけたものであらう。ここには他には見られない独特な開創説話を語る。

高野建立は弘仁年中なり。始め大僧正、伽藍を建立する処を問ふ。時に丸大夫有り。紀国の人なり。是れ即ち円明律師の尊父なり。以て大僧正に聞かせるに「紀伊の国伊土郡に於て深く南山に入るに幽仙の地有り。其の広博なること無量なり」と。茲に於て大和尚、甚だ感悦して信叡法師を差し、使と為して其を臨見せしむ。即ち信叡法師、還り来たりて言はく「実に其の地、廣大無辺にして、其の中に国郡を建てる可し」と。大師、重ねて大軌（徳力）実慧を差す。明らかに其の地を見、並びに相を取る時、両僧還り来たりて言はく「甚だ吉祥の相有り。是れ秘教相応の地なり」と。大師、益々感悦し、自ら其の地に臨み、伽藍を建立す。其の時、弘仁年中なり。先づ金堂を造り、後に宝塔を構ふ（未だ構造し了らず。後々師成功す）。（以下略）

高野山開創にあたり、弘法大師が伽藍建立の地を探していると、円明律師の尊父である紀伊の国の人、良豊田丸大夫なる人物から紀伊国伊都郡の南山の地を教えられ、弟子の信叡法師・実慧などを派遣してその地を見させた、という。この話については先稿でも取り上げたが「紀伊国司太政官符并国符案」は、『太政官符案并遺告』『御手印縁起』に載せる紀伊国の国司藤原文山に下された高野山を空海に賜る太政官符⁽³¹⁾であり、参議従三位秋篠安人と共に左少史正七位上上村主豊田麿が署名している。左少史は太政官の中で官符などの文案を作成する役であるから、この官符の文章を作成したのが上村主豊田麿とされていることになる。この「大阿闍梨云」の一文に見られる良豊田丸太夫は、官符を作成した太政官の役人（とされた人物）の名前を取り込んだものではないかと思われる。「豊田丸」の「丸」は「麿」を写したものであろう。『新撰姓氏録』⁽³²⁾によれば「上村主」姓は広階連と同祖とされ、魏の武帝の男である陳思王の裔とされる帰化人系統の一族であるが「上」姓とも称される。『続日本紀』によれば持統天皇（六四五～七〇二）の時代に大学博士であった上村主百済は、大宝四（七〇四、改元して慶雲元）年に阿刀姓を賜っている。⁽³³⁾ともかく上村主姓の者が文官となつていてもおかしくは無いが、豊田麿については他に検索できていない。また「良」姓についても不明である。その地（高野）を見分させるために信叡法師と実慧大徳を差し遣わした、というのは、空海が紀伊国の有力者某（丹生祝家カ）に対して送った「泰範実慧派遣消息」に拠るものか。ただしこの信叡法師についても、どういう人物か検索できなかった。

この「大阿闍梨云」の高野山開創説話は「紀伊国司太政官符并国符案」と共に、聖賢（二〇八三）

一一四七)の『高野大師御伝⁽³⁴⁾』に引用され、その後『弘法大師行化記裏書』や『行化記』の異本とされる作者不詳の『弘法大師御伝』、賢宝の『弘法大師行状要集』、江戸期になつてから得仁上綱の『弘法大師年譜』、作者不明の『高野大師行化雑集』などに引用されるが、その他にはあまり見ることはできないようである。

この良豊田丸太夫の子とされる円明律師(八五二)は空海の十大弟子の一とされる東大寺僧であり、嘉祥三(八五〇)年七月に権律師、同年十二月に転正(律師)となり、翌仁寿元(八五二)年に没している。空海滅後の承和四(八三七)年正月九日付けで、実慧等が大唐青竜寺の恵果和尚墓前へ送った「円行の入唐に託して青竜寺に寄せる書」に「伝灯大法師 円明」と署名をしている⁽³⁵⁾(承和三年五月五日付け「真済真然の入唐に託して大師の示寂を青竜和尚の墓前に報じ、兼ねて諸々の同法侶に示す書」が偽文書であることは、以前に述べた⁽³⁶⁾)。また三浦章夫編『弘法大師伝記集覽⁽³⁷⁾』によれば、『弘法大師弟子譜』に「氏族生来、聞く所無し。史録を考え、遺を拾ふに、初め南都に三論を学ぶが如し。後に大師に承事して密教を受け、天長の初めに東寺の入寺と作る。云々」とされるのに対して「東寺真言八祖血脈略抄」には「良豊田丸太夫の子」としている。

五、『今昔物語』

『今昔物語』は成立時期が不明であるが、およそ十二世紀頃の成立ともされる。『今昔物語』の材料とされる『注好選』⁽³⁸⁾の成立が十一世紀末から十二世紀初頭とされるとすれば、やはり十二世紀前半か。この中の弘法大師説話における投擲三鈷の話は「弘法大師、宋（唐）に渡りて真言教を伝へて歸り來たる語第九」⁽³⁹⁾の中に語られる。

亦、和尚、本郷に返る日、高き岸に立て祈請して云く「我が伝へ学べる所の秘密の教、流布相応して、弥勒の出世まで持つ可き地有らむ。其の所に落つ可し」と云ひて、三鈷を以て日本の方に向ひて擲るに、三鈷、遙かに飛びて雲の中に入りぬ。

ここでは高野山を「弥勒の出世まで真言教をたもつべき地」としている。これは弘法大師入定信仰に拠る書き加えといえよう。更に「弘法大師始建立高野山語第二十五」⁽⁴⁰⁾に高野山の開創が語られ、

今は昔、引法大師、真言の教を諸々の所に弘め置き給て、年漸く老に臨み給ふ程に、数々の弟子に、皆、所々の寺々を譲り給ひて後「我が唐にして擲げし所の三鈷、落ちたらむ所を尋ねむ」と思ひて、弘仁七年と云ふ年の六月に、王城を出でて尋ぬるに、大和の国、宇智の郡に至りて一人の獵の人に会ひぬ。其の形、面赤くして、長八尺計り也、青き色の小袖を着せり。骨高く、筋太し。弓箭を以て身に帶せり。大小二の黒き犬を具せり。即ち此の人、大師を見て過ぎ通るに、云く「何ぞの聖人の行き給ふぞ」と。大師の宣はく「我れ、唐にして三鈷を擲げて、禪定の靈穴に落ちよ」と誓ひき。今、其の所を求め行く也」と。獵者の云く「我れは是れ、南山の犬飼なり。我れ、其

の所を知れり、速かに教へ奉る可し」と云ひて、犬を放ちて走ら令める間、犬失せぬ。大師、其れより紀伊の国の堺の大河の辺に宿しぬ。此に一人の山人に会ひぬ。大師、此の事を問ひ給ふに「此れより南に平原の沢有り。是れ、其の所なり」と。明くる朝に、山人、大師に相ひ具して行く間、密かに語りて云く「我れ、此の山の王也、速かに此の領地を奉る可し」と。山の中に百町計り入りぬ。山の中は直しく鉢を臥せたる如くにて、廻りに峯八つ立て登れり、松の云はむ方無く大なる、竹の様にて生ひ並びたり。其の中に一の松の中に大なる竹膀有り、此の三鉢、打ち立て被れたり。是れを見るに、喜び悲しぶ事、限り無し。「是れ、禅定の靈輻也」と知りぬ。「此の山人は誰人ぞ」と問ひ給へば「丹生の明神となむ申す」。今の天野の宮、是れ也。「犬飼をば高野の明神となむ申す」と云ひて失せぬ。

とある。基本的には『建立修行縁起』と同じであるが、そこそこに小異がある。『今昔物語』では、弘法大師は唐から擲げた「三鉢の落ちた所」を探そうとして弘仁七年六月に王城を出た、とされる。『建立修行縁起』では「禅定の靈窟」を探すためであったが、三鉢杵探索が主とされている。また弘仁七年は空海が四十三歳であり、まだ造東寺司（東寺僧別当・東寺長者）にもなっていないが、『今昔物語』では「年漸く老に臨み給ふ程に、数々の弟子に、皆、所々の寺々を譲り給ひて後」とされている。空海の年齢に関する意識が分からなくなっているということか。また南山の犬飼と出会った弘法大師との会話において『建立修行縁起』では「則ち和尚の過ぎ通るを見て、不審を問ふ。和尚、踟躕して（ぐ

ずぐずしながら）子細を問訊したまふ」とのみあつた所が「即ち此の人、大師を見て過ぎ通るに、云く『何ぞの聖人の行き給ふぞ』と。大師の宣はく『我れ、唐にして三鉢を擲げて、禪定の靈穴に落ちよ、と誓ひき。今、其の所を求め行く也』と」であつて、より詳しくなっている。また紀伊の国の堺の大河の辺で出会つた山人姿の山王が大師を案内する間に、「山には桧が竹のように並び生え、その中の一つの桧に大なる竹の膀（股）があり、そこに三鉢杵が打ち立つていて、禪定の靈窟であることが知られる」と語つたとする。またこの山人（山王）が「丹生の明神」であるとされ、女神である丹生津姫の姿が見られないのと、南山の犬飼が高野明神であるとされている。『今昔物語』は広く一般衆庶に広まつたと思われるが、高野山開創説話については、『建立修行縁起』や後の「弘法大師行狀図画」などの絵伝類の説話が広まつており、『今昔物語』の話が定着しているとは言えないようである。

六、湯河原玄円菩薩の『日本神仙記』

藤原敦光（一〇六三—一一四四）撰『大師行化記』は『金剛峰寺建立修行縁起』から投擲三鉢の記事を引き、⁽⁴⁾合わせて、

神仙記に云く、大師、唐朝に於て一鈴杵を投げ、本朝の勝地を卜う。一は東寺に墜ち、一は紀伊国高野山へ落ち、一は土佐国室生戸山へ落つ。帰朝の後、相ひ尋ねて、皆仏法を弘む。

という文を引く。この「神仙記」は、後の諸弘法大師伝に逸文が引用される湯河原玄円菩薩の作という『日本神仙記』であろう。これは三鉢杵を三つの金剛杵としたものといえるが、ただ本文では、投げたのは「一鈴杵」とされる。他には見られない独自の話である。『日本神仙記』は、撰述年代は不明であるが、『大師行化記』の他『行化記』裏書、寛信法務（一〇八四～一一五三）作と推定されている『東要記』などに引用されており、また理明房興然（一一二一～一二〇三）の『五十巻鈔』には、心覚阿闍梨（一一一七～一一八〇）の云くとして、済暹（一二〇二～一二一五）の記である『済暹僧都記』に引かれるとされる⁽⁴²⁾（同じ記事が賢宝へ一三三三～一三九八）の『弘法大師行状要集』にも見られ、ここでは『済暹僧都抄』とされる）。ただし現在知られている済暹の著作には『日本神仙記』の引用を見ることはできない。ただ『済暹僧都記（抄）』への引用が正しいとすれば、その成立は十一世紀前半まで遡り得る。若しそうであれば、仁海撰『秘密家宗体要文』の帰朝の海上において悪竜降伏した三鉢杵の話から、『行状集記』『建立修行縁起』の投擲三鉢の話へ至る間に、特異な話が語られたということになるうか。湯河原といえば相模国（神奈川県）の湯河原であろう。京都から離れた東国において成立したものとすれば、『日本神仙記』の特異性も納得されようか。また『東要記』には投擲三鉢の話は引かれていない。

七、絵伝類

武内孝善氏によれば、弘法大師絵伝（絵巻）には五系統があり、⁽⁴³⁾

- (1) 十巻本『高祖大師秘密縁起（秘密縁起）』
 - (2) 六巻本『高野大師行状図画』（地蔵院本）
 - (3) 十巻本『高野大師行状図画』（元応本）
 - (4) 十二巻本『弘法大師行状絵』（東寺本）
 - (5) 版本十巻『高野大師行状図画』
- であるとされる。

(1) 十巻本『高祖大師秘密縁起』系統は、安樂寿院本が唯一の完本とされ、他に残簡本が二本があるとされるが、智積院にも転写本が伝存する（書写は新しいようである）。梅津次郎氏⁽⁴⁴⁾によれば、絵伝類の中で最も古いのは『秘密縁起』であり、その原本は、嘉禎元（一二三五）年から弘安八（一二八五）年の間頃とされているという。

(2) 六巻本『高野大師行状図画』系統の伝本は、高野山地蔵院旧蔵本のみであるという。昭和六十三（一九八八）年の地蔵院の火災により焼失したが、複製本が残されており、内容を知ることができる。その成立については二説があり、梅津氏によれば文永九（一二七二）年前後、宮次男氏⁽⁴⁵⁾によれば建長（一二四九～一二五六）頃の成立という。武内氏は、どちらにしても十三世紀中頃から後半に掛けての成立とみなされており、『秘密縁起』と共に、この時代の絵巻作成の気運が醸成されていた

と指摘されている。

(3)十巻本『高野大師行状図画』系統は、最も伝本が多く、広く流布した系統であり、原本の成立が元応年間(一二一九―一二三二)とされる所から「元応本」と称されるという。六巻本との重複が多く、重複する章段の詞書きが殆ど同じであることから、長谷宝秀師はこの十巻本(元応本)から六巻本が略出されたとされたが、今は六巻本から増補したと考えられている、という。

(4)十二巻本『弘法大師行状絵』は、空海生誕六百年に当たる応安七(一二七四)年から康暦元(一二七九)年にかけて東寺で作られたもので、その詞書きには東寺の三宝の一とされる観智院賢宝(一二三三―一二三八)の力があつたとされる。賢宝には応安七年成立の『弘法大師行状要集』があり、先行する諸空海(弘法大師)伝を引きながら、その記事の真偽を検討しているが、その撰述は本絵巻の詞書きのためであつたろう。

(5)版本十巻『高野大師行状図画』は近世になつてからの成立とされ、元応本を基に『秘密縁起』を参照して作られたものとされている。近世の出版であり、衆庶の間に最も広く流布したものといえよう。説話的弘法大師伝を一般に弘めたのは、この版本『高野大師行状図画』であつたと思われるが、今取り上げている高野山開創説話については、必ずしも元応本・版本の話が広まっているともいえない。

(1) 『高祖大師秘密縁起』

先ず『秘密縁起』の投擲三鈷の話では、唐の明州の津という所に船を浮かべて、帰朝しようとした時に三鈷杵を投げたとされる。

元和元年。日本の大同元年に当る。八月に大師、明州の津と云ふ所にて、船をうかべつつ帰朝せんとし給ひし時、ふかく誓願を發して祈念していはく「我が習ふ所の密教、流布相応の勝地あらば、此の三鈷、先にいたりて点ずべし」といひて、日本国に向て三鈷を投げあぐるに、遙にとびて雲中に入ぬ。いたらん所はしらねども、願力の空しからざる事を顕せり。親り是れを見る人、感ぜざるはなし。昔、淮南の犬たちまちに天にのぼりし。一旦の仙術、何の益がある。今の金剛杵、はるかに雲にとぶ。三密の加持、仰ぐべし、信すべきなり。

殆ど『建立修行縁起』の漢文を和文化したものであるが、最後に淮南の犬の話を加えて、真言密教の三密加持の力を讃嘆している点が異なっている。

また「高野尋入」段も『建立修行縁起』の和文であるが、

弘仁七年の夏、大師、城外に出て畿内を修行しつつ、伽藍建立すべき所を求め給ふに、大和国宇智郡と云ふ所にて一人の獵者に行き逢ひぬ。其の形よのつねの人にことなり、長八尺にもあまりたらんとおぼしきが、骨たかく、筋ふとくして、其の色あかし。青色の衣をきて、弓箭を帶びたり。又黒白の犬を二足具せり。大師、此の獵者にの給ひけるは「汝は是れいかなる人ぞ。其の

様を見るに、久しく山野になれたる形なり。我、伽藍建立の志有り。若しさるべき所や侍る」と問ひ給ふに、答へて云く「我は是れ南山の犬飼なり。山地を領する事、其の数あり。其の中に幽然たる平原あり。和尚、来て住し給へ。助成を致侍らむ」と云ひて、此の犬を走らしめて、おのれも共に失せにけり

とある。この中で宇智郡で逢った獵者について「また黒白の犬を二疋具せり」とし、ここに「大小二疋の黒犬」が「黒白二疋の犬」に変化している。後に流布する高野四所明神の圖像で、階の下に居る二匹の犬が黒犬と白犬とされるのは、この絵伝の伝承によるものといえよう。この黒白の犬について『太政官符案并遺告』に載せる「丹生都比売及び高野大明神に仕ふる丹生の祝氏」と題する丹生祝氏の延暦十二年の籍文に、紀伊国の黒犬一伴と阿波国の白犬一伴を献じたことがみえるので、そこから黒白二匹となったものであろうか。またここで弘法大師は、その獵師に対して問答しているが、『建立修行縁起』では「和尚の過ぎ通るを見て、不審を問ふ。和尚、踟躕して（ぐずぐずしながら）子細を問訊したまふ」というように、その問答の内容は示されていない。大師は獵師の姿を評して「其の様を見るに、久しく山野になれたる形なり」といい、更に「汝は是れいかなる人ぞ。我、伽藍建立の志有り。若しさるべき所や侍る」と質問しており、それに対する獵師の答えが「我は是れ南山の犬飼なり。云々」とする『建立修行縁起』で語られた内容となっている。次に「明神来告」段では、

さて此の事を不思議と思ふて、猶、山路を尋ね行くに、紀伊国のさかひ大河と云ふ所にして日

暮れにければ、あやしの民の屋に宿り給ぬ。一人の老翁有り。是に向て「幽閑寂靜の砌、伽藍相応の所有りや」との給に、翁のいはく「是れより南に平原あり。三面は山つらなりて、山門辰巳に開け、万水東に流れ一水に集まる。ひるは常に奇雲たなびき、夜な夜な靈光現ず。是れ紀伊国いと南に当れり。速やかに到るべきよしをかたる。

とあつて、宿りをしたのが「あやしの民の屋」とされ、更に『建立修行縁起』の「山民・山人」が「老翁」へと変つてゐる。また大師はこの老翁に対して「幽閑寂靜の砌、伽藍相応の所有りや」と問うてゐるが、これも『秘密縁起』で加えられたものであらう。次に「丹生献地」では、翁と共に尋ね行きて其の地を暦覽し、その地形を誉めた後、

此の獵師は高野大明神のあらはれ給ひたりけるとぞ申し伝えたる。其の御母丹生明神と申しき。人体を現じて山の堺一万町計りをかぎりて大師に献じて信仰の心を表する由、しめし給ひしかば、善神守護の山として、教法流布すべき地なりとよろこびたまへり。

とあつて、獵師（南山の犬飼）が高野明神であり、その母が丹生明神（丹生津姫）であつて、丹生明神が所領を献じた（寄進した）とされる。『今昔物語』でも獵師を高野明神としていたが、『秘密縁起』では、丹生明神は高野明神の母（女神）とされており、河辺から高野まで案内した「山民・山人」ではなく、本来の姿に戻つてゐる。そして伽藍建立のために藪を切り開き三鈷杵を発見する「三鈷放光」段では、高野の地を乞う上表について述べた後に、

此の事、叡慮に叶ひければ、勅許とどこほりなくして、明神相伝の上に、かさねて御手印の印符を下さる。其の儀厳重也。大師、是によりて彼の山に趣て、寺院をたてんが為に樹を多くきはらはれけるに、みどりの松の木間より、光明のかがやきけるを、あやしと見給ふに、元和元年に大唐明の州の津にてなげし所の三鈷、松の枝にかゝれり。是を見るに密教有縁の地といふ事「さきたて既に点じけるを」(あきらけし)誓願、又くちずして、重て相ひ見る事をぞ、深く感じ給ひける。明神のしめし給し奇雲靈光のしるしも、此の事を告げ給ひけるにや。

と三鈷杵発見の様子が語られる。ここで初めて三鈷杵の掛かった木が松であったとされている。ただ「三鈷の松」について武内氏は『寛治二年高野御幸記』に既に見られることを指摘されている。『寛治二年高野御幸記』は白河上皇(一〇五三―一二二九)が寛治二(一一〇八)年二月二十二日から三月一日にかけて高野山へ参詣された時の記録であり、寺の宿老が御影堂の前の松の木に三鈷がかかっていたことを話したという。⁽⁴⁷⁾

(2)六卷本『高野大師行状図画』(地藏院旧蔵本)

これに対して六卷本『高野大師行状図画』の「大師擲三鈷事」は、

大師歸朝のために、明州と云ふ津に出で給ひし時、ねんごろに祈請して、願を發してのたまはく「我ならうところの秘法、若し相応の地あらば、吾が此の三鈷、飛び至りてとどまるべし」と。

即ち日本国の方に向て此れをなげ給ふ時、遙に雲の中に入ぬ。京機の諸人、なごりをおしみてまつり、道俗の諸衆、かずをしらずあつまれり。皆此の事を見て驚怪せずと云ふ事なし。渡海の間、風波の難にあひて、漂波のあやぶみありし時、大師、又願を発して「我かならず諸天の威光をまし、国家の福利をなし、衆生の巨益をたれんがために、一禪院をたて、法によりて修行せん。善神護念して早く本郷に達せしめ給へ」と祈念し給ひき。忽に感応ありて、逆浪悉くしづまり、着岸とどこをりなかりき。今の高野山金剛峯寺は、其の三鈷の迹を見て、彼の素願を果げむがために建られたるところの仁祠也と申し伝へたり。

と見られる。前半は『秘密縁起』と同様に『建立修行縁起』の和文化と見られるが、文章的に小異がある。また三鈷を投げたところで「京畿の諸人、なごりをおしみてまつり、僧俗の諸衆、かずをしらずあつまれり。皆、此の事を見て驚き怪しまざると云ふ事なし」という一文が入り、「布勢海宛消息」による寺院建立の誓願が語られる。これは『建立修行縁起』には見られなかった記事であり、『高野大師御広伝』や『弘法大師御伝』を引くもので『建立修行縁起』から直接の絵伝化では無いといえよう。また東寺本十二巻『弘法大師行状絵』では、この三鈷杵が竜猛・竜智・金剛智・不空・恵果・大師と相承されたものとする。またどの絵伝でも、その絵では海岸に立って三鈷杵を投げている。

次に「高野尋入」の段も『秘密縁起』同様の『建立修行縁起』からの和文化であるが、やはり本文には相違が見られる。

弘仁七年孟夏の比、大師、禪定の依所を求め、相応の靈崛を尋ねむがために、畿内を修行し給ふに、大和国宇智郡にして一人の獵者に値ひ給へり。其の色ふかくあかくして、たけ八尺斗り也。袖ちぬさき青き衣をきたりけり。骨たかく、すじふとくして、勇壯の形也。弓箭を身に帶して、大小二の黒き犬をしたがへたり。大師を見たてまつりて、やすらひて思ふところあるに似たり。大師、問ふての給はく「汝いわねをふみ、かけはしをわたりて、広く山野を廻る。何なる靈所を見、何なる幽崛をか知れる」と。獵者の申す様「我れは是れ南山の犬飼也。領する所の山地万許町也。其の中に幽平の原沢あり。三面に山つらなりて、山門辰巳にひらけたり。万水東に流て、みなまた一水にあつまれり。昼は常にあやしき雲そびへ、夜は又靈光現ず。是れ紀伊国伊都の郡也。和尚、来住し給はば助成したてまつらん。我が性山水になれて、人氣に非（疎）し。幸に菩薩に遇ひたてまつる。我が徳の至る也。願はくは我がために威福をまし給へ」と云ひて、犬をはなちてさりぬ。

ここで大師と獵師（南山の犬飼）の問答で、大師が獵師に問いかける言葉が具体的に示されるのは『秘密縁起』と同様であるが、その内容は異なっている。また獵師は「大小二の黒き犬をしたがへたり」とされており、『秘密縁起』のような「黒白の犬」とはされておらず、『建立修行縁起』のままである。次の「巡見上表事」では、

大師、其の後、紀伊国の境に行て、紀の川ほとりにすみ給ふ。今の政所の慈尊院是れ也。大和

国にて御覽ぜられし犬、もとよりあり。大師をみつけたてまつりて、山をさしてのぼる。大師、即ち彼の犬にあひぐしてのぼらせ給ふほどに、平原広沢に至りぬ。其の地形を御覽するに（以下略）とあり、紀ノ川辺りでの宿りの記事も無く、『建立修行縁起』における「山民・山人」、『秘密縁起』の「老翁」も登場せず、その言葉であった「我が性山水になれて云々」の明神による所領寄進の告げが獵師（南山の犬飼）の言葉とされている。それに合わせて、獵師（南山の犬飼）の連れていた犬が現れて、大師を高野まで案内している。更に「丹生託宣事」には、

大師、彼の山に通ひ給ふ間、山路のほとりに十町計の沢有り。山王丹生の大明神の社也。今のあまのと云ふ是れ也。大師、此所に一宿し給ふに、大明神託宣しての給はく「妾、神道の威福を望む事久し。今〔菩薩〕脱力）の此所に至り給ふ。妾が幸也。弟子、昔人たりし時、食国皇命、家地万許町を給へり。（中略）願くは是れをたてまつらん。ながきよに仰信の心をあらはさんと也」との給ひき。始め遇ひ給ひたりし獵者は高野の大明神也。丹生高野とて、山上山下に此れをいわひたてまつりて、財施・法施たゆる事なし。威福を増し給はん事、をしてはかるべし。此の二神をば、即ち母子にてましますと申しつたへたり。或は夫婦とも申し伝へたり。高野の大明神は大神宮の御をと、（弟）也。玉津島にして、そとをりひめを思ひ人にて、御馬にてしのびて通ひ給ひけるを、丹生大明神やすからぬ事におぼしめされけり。かの玉津島へ神馬をたてまつらるる時は、明神の御前にては、くつばみのおとをならさぬ事にて侍る也。垂迹の前は凡夫に示同し給ふ御方

便なるをや。

とあつて、丹生津姫と高野大明神を母子とする説と夫婦とする説を挙げた上で、高野大明神は大神宮の弟とされ、玉津島のそとおりひめ（衣通姫）と恋人であり、馬に乗つて玉津島まで通つていた、という独自の記事が見られる。但しこの話がどこから来たものかは検索できていない。また高野明神が丹生津姫の子であるならば、大神宮の弟とすると、大神宮もまた丹生津姫の子となるのであろうか。しかしこの話が夫婦という伝承によるものとすれば、この「大神宮」が紀国の大神宮であれば、日前・国懸神社か、伊太祁曾神社か。日前・国懸神社は天照大神の神霊である御鏡を祀るとされ、そうすると高野明神が天照大神の弟となつてしまい、丹生都比売と高野明神が共に伊邪那岐尊から生まれた姉弟となつてしまふのではないか。伊太祁曾神社は、素戔鳴尊の子である五十猛命を祀つており、また紀国一宮ともされる。五十猛命は天降りして種を樹え大八洲を青山にしたとされ、紀国に坐す大神とされる。⁽⁴⁸⁾「大神宮」が伊太祁曾神社の五十猛命であれば、高野明神は素戔鳴尊の子となるが、どうであらうか。ご存知の方が居ればお教え頂きたい。

「三鈷宝剣事」にも、

大師官符を給はせ給ひて後、伽藍を建立せんがため、樹木をきりはらはるる間、大なる樹の木末に、唐土にてなげ給し三鈷巖然として有り。弥々歡喜の心をもよをし、重ねて相応の地と云ふ事を知り給ひぬ。地主山王の告げ給ひし、よなよなの靈光は、此の木の上の三鈷にてぞ有りける。

又大塔を立てむがために、地をひかれける時、ながさ五尺ひろさ一寸八分の宝剣、地中よりほり
いだされき。前仏の遊所、伽藍の旧基と云ふ事、明らか也。勅によりて觀覽を（に）備えへしに、
即ち召し留められにけり。後にいささかたたりをなす事侍りけるに、御占をこなはれたりければ、
此の御劍のわざにやとみへければ、銅の筒に入れて、本の如く返しをかれにけり。彼の三鈷のか
かれりし松の本をしめて、御菴室をつくられけり。今の御影堂、是れ也。

とある。「伽藍を建立せんがため、樹木をきりはらはるる間、大なる樹の木末に、唐土にてなげ給ひし
三鈷巖然として有り」とあつて、『秘密縁起』の「松の枝」ではなく『建立修行縁起』と同じ「樹の末」
に三鈷杵があつたとされる。ただし終わりに「三鈷のかかれりし松の本をしめて、御菴室をつくられ
けり」とあつて、今の御影堂前の松が三鈷の懸かつた木（三鈷の松）であつたとしており、『建立修行
縁起』の記事と三鈷の松の伝承とを合わせたものとなっている。また大塔を立てんがために地を開く（掘
る）と「ながさ五尺ひろさ一寸八分の宝剣。地中よりほりいだされき」とあつて、宝剣の大きさが示さ
れるのは、やはり『高野大師御広伝』を経たものといえよう。このように六卷本『高野大師行状図画』
の詞書きは、直接に『建立修行縁起』によると言うよりも『高野大師御広伝』によつて作られたもの
ということができる。

これに対して(3)十卷本『高野大師行状図画』（元応本）は、その詞書きが六卷本（地蔵院本）と殆ど同
じだとされるが、しかし南山の犬飼の連れた二匹の犬について、六卷本の「大小二の黒き犬」から『秘

密縁起』による「大小二の黒白の犬」へと変えられており、その影響を見ることができる。

(4) 版本『高野大師行状図画』は、元応本を基に『秘密縁起』を参照しているとされるが、高野山開山説話に関しては元応本と大きな相違は無く、『秘密縁起』による特段の追加も無いようである。獺師の連れた二匹の犬は、元応本と同様に『秘密縁起』による「黒白の犬二足」であり、六巻本とは異なっている。しかしその他は元応本・六巻本と殆ど同じであり、やはり河辺の宿りで出会う「山民・山人」「老翁」は登場せず、犬が実際の案内をしたとされる。

この後の弘法大師伝における高野山開創説話は、おおよそここまで見てきた話を引用したものとなっているようである。詳しく見れば相違も見られるが、今はここまでの紹介としておきたい。

註

- 1 武内孝善『弘法大師空海の研究』第四部「高野山の開創」平成一八（二〇〇六）年、吉川弘文館刊。また同『弘法大師伝承と史実』平成二〇年七月、朱鷺書房刊にも詳しく触れられている。
- 2 拙論「高野山開創説話について―十・十一世紀の丹生津姫説話―」『密教学研究』第五七号、令和七年三月
- 3 『弘法大師伝全集』第二巻、五〇頁上―五六頁下
- 4 『弘法大師伝全集』第一巻、一五〇頁上―一八六頁下
- 5 『弘法大師伝全集』第一巻、一七八頁下

6 『弘法大師全集』第三輯、五二四—五二五頁・『定本弘法大師全集』第八卷、一七一—一七二頁

7 『遍照發揮性靈集補闕鈔』第九卷『弘法大師全集』第三輯、五三—五二四頁・『定本弘法大師全集』第八卷、一六九—一七一頁。
また『高野雜筆集』『弘法大師全集』第三輯、五三—五二四頁・『定本弘法大師全集』第七卷九八—九九頁

8 『弘法大師伝全集』第一卷、一六二頁上

9 『弘法大師伝全集』第一卷、一七八頁下—一七九頁上

10 拙稿「弘法大師入定信仰の成立について(2)―摩訶迦葉の入定と高野山浄土―」『川崎大師教学研究紀要』第九号、令和六年三月

11 『弘法大師伝全集』第一卷、五二頁上

12 『弘法大師伝全集』第一卷、五三頁上—下

13 『弘法大師伝全集』第一卷、七六頁下

14 『弘法大師伝全集』第三卷、一四四頁上—下。賢宝撰『弘法大師行状要集』では、弘仁七年の高野山開創については参考書本を引いて記述するが、同じ弘仁七年に空海が稲荷神と東寺守護について契約したとして「稲荷大明神流記」を引用する。ただその内容は『建立修行縁起』の高野発見の経緯とそっくりであり、これを翻案したものといえる。以下に『弘法大師行状要集』引用の本文を掲げる。

稻荷大明神流記

弘仁七年孟夏之比。大和尚、斗敷之時、紀州田辺の宿に於て異相の老翁に遇ふ。其の長八尺計り。骨高く筋太く、内に大権の気を含み、外に凡夫の相を示す。和尚を見、快んで語りて曰く「吾、神道に在り、聖に威徳在り。方に今、菩薩、此の所に到る。弟子の幸なり」。和尚の曰く「靈山に於て面拜之時、誓約未だ忘れず。此生・他生、形異にして心同じ。予に秘教紹隆之願有り。神に佛法擁護之誓在り。請ふ、共に法を弘め生を利し、同じく覺亭に遊ばむ。夫れ帝都の坤の角九條の一坊に大伽藍有り。東寺と号す。鎮護国家の為に密教を興す可き靈場なり。必らず必らず待ち奉り待ち奉

らむ而已」。化人の曰く「必らず参会して和尚之法命を守らむ」等と云云。

- 15 『大日本史料』第二編、一九冊、二八四―二八五頁。『続大日本古記録』「小右記」六・二三七―二三八頁。『増補 史料大成』別巻二「小右記」二・三九〇頁上―下

- 16 知識寺は河内国大県郡内（現・大阪府柏原市太平寺）に所在した古代寺院。茨田宿禰を中心とした知識（信仰集団）により七世紀後半に創建された。

- 17 拙論『覚鑊と神祇』中世文学と隣接諸学3『中世神話と神祇・神道世界』平成二三（二〇一一）年、竹林舎刊

- 18 『興教大師全集』上・四四八頁

- 19 『弘法大師伝全集』第一巻、三四頁下

是くの如く和食明神の素意を受け、明星天子の玄軌を開く。即ち阿波国の嶽に攀じ登りて、独り太龍の嶺に経行す。身には絹綿を除いて本尊の威儀に住し、口には漿穀を断じて自心の瑜伽を觀ず。練行、遙かに月を送り、薰修、惟れ日を累ねれども、勝利、曾て無く、悉地、未だ現れず。爰に神童、退きて宿習を顧みるに、機縁、未だ熟せず。進みて来世を思ふに、値遇、憑み有り。如かず、速かに一生の身命を捨てて、三世の仏力を加えんには。即ち居を石室に通れ、忽ちに身を巖洞に擲つ。時に護法、之れを受けて接足し、諸仏、之れを助けて、以て摩頂す。是れ則ち命を捨てて諸天の加護に預かり、身を投げて悉地の果生を得たり。一心の懇篤、未だ地に墜ちず。五尺の宝剑、忽ちに天自り降りて、即ち室内に飛び、方に壇上に立つ。永く太龍の聖跡に留り、遂に不動之靈輻に納む。専ばら一朝の静謐を扶けて、永く三韓の怨讎を摧く。当に知るべし、神通乗の金剛なり。豈に虚空藏の宝剑に非ざるや。是れ偏へに法を重じて命を軽んじ、身を捨てて道に帰す。

ここには太竜嶽における宝剑飛来だけではなく、山上から身を投げて護法によって助けられた話が語られる。これは雪山童子や善財童子の話が比較的語られる点を含めて、絵伝類（『高祖大師秘密縁起』・高野山地蔵院旧蔵六卷本『高野大師行状図画』・十卷本『高野大師行状図画』（元応本）等）にみられる「捨身ヶ嶽」の話と共通する。

- 20 『弘法大師伝全集』第三巻、八六頁。『大龍寺縁起』の引用の終わりに割注によって「此の記疑い有り。之を決す可し」としている。
- 21 『弘法大師伝全集』第一巻、二二九頁下—二四〇頁上
- 22 『弘法大師伝全集』第一巻、二四八頁下—二四九頁上
- 23 「大殿の消息」は、藤原道長が高野登拝の前に、高野山を諸仏の浄土と見た夢について「小野法印御房」に問い合わせた消息とされるが、これが偽文書であることは、拙稿「弘法大師入定信仰の成立について(1)―十・十一世紀の史料をめぐって―」川崎大師教学研究所『仏教文化論集』第一三号、令和六年三月に述べた。
- 24 『大日本仏教全書』第一〇一巻、六頁上—下。『弘法大師伝全集』第三巻、四四頁上—下
- 25 『校刊美術史料 寺院編』（昭和四十七年三月、中央公論美術出版刊）上巻、六五—一二四頁。「諸寺縁起集 醍醐寺本」には、冒頭の解説に拠れば「東大寺」「元興寺縁起」「西大寺縁起」「薬師寺縁起」「招提寺建立縁起」「放光菩薩記」「弥勒寺本願 善仲善算縁起」「清水寺建立記」「子嶋山寺建立縁起」「大神宮法華十講会縁起」「高野寺縁起等」「興福寺 在超昇寺大念仏」「二竜門寺 在大和国吉野郡官造作勅施僧正」「大日本洲大官大寺門徒大唐大福光寺増竿」「大安寺崇道天皇御院八嶋両処記 文」「関寺縁起」「六角堂縁起」「粉河寺大卒都婆建立縁起」を載せている。
- 26 『校刊美術史料 寺院編』（昭和四十七年三月、中央公論美術出版刊）上巻、一〇五—一一一頁
- 27 『弘法大師伝全集』第二巻、一頁上—三一頁上
- 28 『大日本仏教全書』第一三一巻、七五頁上
- 29 『弘法大師諸弟子全集』巻中、四二三—四二四頁
- 30 「良豊田丸大夫」は、「高野寺縁起等」では「良豊田丸大夫」となっているが、官符の「豊田磨」から取られた名前であれば、『金剛峯寺雑文』の「良豊田丸大夫」が正しいであろう。
- 31 『弘法大師伝全集』第一巻、一頁下

- 32 佐伯有清『新撰姓氏録の研究』（昭和三七年、吉川弘文館）「本文編」二八四頁
- 33 『続日本紀』『新訂増補国史大系』2『続日本紀』二〇頁
- 34 『弘法大師伝全集』第一巻、二四七頁上―二四八頁下
- 35 『弘法大師諸弟子全集』上巻、四九七頁
- 36 拙論『平城天皇灌頂文』をめぐって『平安期真言密教の研究』第一部、平成二〇年、ノンブル社刊（元『平城天皇灌頂文』をめぐって①）『大正大学大学院研究論集』第一一〇号、昭和六二年及び『平城天皇灌頂文』をめぐって②『大正大学総合仏教研究所年報』第九号、昭和六二年に加筆改稿して収録した）
- 37 『弘法大師弟子譜』三浦章夫編『弘法大師伝記集覽』一〇五三頁。（三宝院文書）「東寺真言八祖血脈略抄」三浦章夫編『弘法大師伝記集覽』一〇三一頁
- 38 前注10の拙論の注15今野達「注好選 解説」『新日本古典文学大系』31「三宝絵詞 注好選」平成九年九月、岩波書店刊を参照されたい。
- 39 「弘法大渡宋伝真言教帰来語第九」『新日本古典文学大系』33「今昔物語集」三・三四―三五、平成五年五月、岩波書店刊
- 40 「弘法大師始建立高野山語第二十五」『新日本古典文学大系』33「今昔物語集」三・七二―七三、平成五年五月、岩波書店刊
- 41 『弘法大師伝全集』第二巻、六二頁上
- 42 興然『五十巻鈔』第四十七「大師事」『真言宗全書』第三一巻、九〇四頁「心覺阿闍梨云。濟運僧都記云。湯河原玄圓菩薩所造日本神仙記云。弘法大師者昔勝鬘夫人。又爲惠思禪師。又於日本國爲聖德太子。又後世爲弘法大師。是則第八地菩薩云々。定知觀音所變也。又第三地菩薩云々。可尋之耳。已上」。又拙稿（講演録）弘法大師の前身譚―弘法大師伝に語られる大師の前身―『密教学』第六〇号、令和六年三月を参照されたい。
- 43 武内孝善『弘法大師 伝承と史実』平成二〇年七月、朱鷺書房刊

- 44 梅津次郎「弘法大師行状絵巻諸本と白鶴美術館本について」『弘法大師伝絵巻』角川書店、昭和五八（一九八三）年
- 45 宮次男「井上家旧蔵 弘法大師伝絵巻について」『美術研究』第二三二号、昭和三九（一九六四）年
- 46 『弘法大師伝全集』第一巻、八頁上
- 47 武内孝善『弘法大師 伝承と史実』平成二〇年七月、朱鷺書房刊。『増補続史料大成』第一八巻、三〇八頁
- 48 「南紀神社録」名草郡「伊太祁曽神社」『神道体系』神社編四十一「紀伊・淡路国」四頁下―五頁上
- 〈キーワード〉空海、弘法大師、高野山、丹生都比売、高野明神、南山の犬飼、飛行三鈷